議員インターンシップ

若年層の政治的無関心

昨今、若者の政治離れが深刻化している。政治参加の指標のひとつである投票率は、若年層において極めて低い。例えば、第43回衆議院議員総選挙の投票結果を年齢別に分析した調査※1によると、全年齢層の平均投票率が61.71%であったのに対し、20～24歳は32.39%と最も低く、それに次いで低かったのが25～29歳の38.47%であった。

期日前投票や投票時間の延長など、投票行動を促す施策が実施されているものの、若年者の投票率の低落傾向は依然として続いている。

政治家にはなりたくない?

全国の小・中・高校生を対象に「将来なりたい職業」を尋ねた調査※2によると、男子小・中学生のトップは「野球選手」、女子小・中学生のトップは「保育士・幼稚園の先生」、高校生のトップは男女とも「学校の先生」であった。

子どもたちが当然知っているはずの職業である「政治家」は、いずれの上位ベスト20にも見当たらない。これは、「政治家とはどんな仕事なのか」をよく知らない、政治家の仕事に魅力を感じていない等、小・中・高校生の政治に対する興味や関心の低さにも起因すると考えられる。

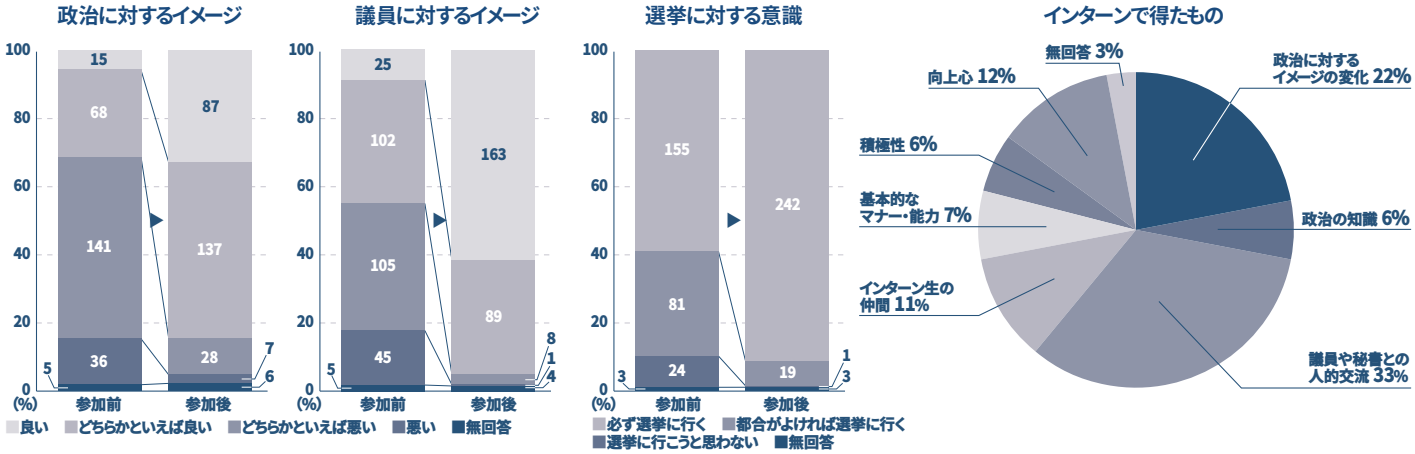
議員インターンシップの試み

若者や子どもたちの政治離れを改めるべく進められている「議員インターンシップ」が、今、注目を集めている。これは、学生が国会・地方議員の事務所でインターンシップをし、生の政治を体験・体感することにより、若年層の政治に対する関心を高めようとする取り組みである。未来を担うべき若者や子どもたちと、現在を担っている政治家、その両者間の距離を近付けようとする画期的な試みだと言える。

今回は、この議員インターンシップを積極的に推進されているNPO法人ドットジェイピーの方々に、その概要や今後の展望等についてうかがった。

※1　財団法人明るい選挙推進協会「第43回衆議院議員総選挙における年齢別投票率」　http://www.akaruisenkyo.or.jp/various/09/
※2　Benesse教育研究開発センター「第1回子ども生活実態基本調査報告書」　http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2005/

資料 インターン後の意識変化



出所：NPO法人ドットジェイピー『第15期活動報告書』16～17頁　http://www.dot-jp.or.jp/pdf/15th-report.pdf

議員インターンシップを通じたジャパン・プロデュースの試み

NPO法人ドットジェイピー理事長
佐藤大吾 氏

NPO法人ドットジェイピー理事
流山市議会議員
松野 豊 氏

日本初の議員インターンシップ「ドットジェイピー」立ち上げ

―― キャリア教育全盛の昨今、就職する前に学生が企業等にインターンシップをすることは、広く社会に定着しつつあります。しかし、議員の事務所にインターン生として入る「議員インターンシップ」は、ドットジェイピーの試みが全国で初めてだと思います。まず、この事業を始められた経緯についてうかがいます。

佐藤 私が22歳のとき、5歳年上の市議会議員に出会いました。大阪府堺市議会議員の久保田暁氏です。彼から生の政治について聞くうちに、学校で学んだ政治学との大きなギャップを感じ、また同時に久保田議員の方も、日ごろ有権者から「議員って普段は何をしているの」と質問されることが非常に多かったために、議員インターンシップというものがあれば、この両者のギャップや疑問が一挙に解決されるだろうと考え、導入の決意を固めました。

学生に向けては「政治学で政治ができますか」、議員に向けては「歩く情報公開」というキーワードで、賛同してくれる人を集めたのが始まりです。

―― 初めてのインターンシップは、どのような状況で行われたのでしょうか。

佐藤 まず、受け入れ先の議員と、受け入れてもらう学生を募集しなければなりません。受け入れ先については、久保田議員の友人の市議3人に声をかけていただきました。議員にとっては人手が増え、しかも情報公開にもつながる。学生は私の友人や後輩30人を集めました。それで初めてのマッチングイベントを開催し、その結果8名の学生がインターン生として、約1カ月、現役議員と活動を共にしたのです。これが最初のインターンシップでした。

―― それからどんどん規模を拡大されたわけですが、何かブレークのきっかけはあったのでしょうか。

佐藤 始めてから約半年後に朝日新聞の天声人語で、「議員インターンシップ」が取り上げられたのです。それまでは地方議会中心で活動していたのですが、このコラムの中で「さて、すべて見て欲しいと胸を張れる国会議員は、どれほどいるものか」という挑発的なメッセージが発信されたことから、国会議員の間でも話題になり、以降、国会議員へのインターンシップも実現していくことになりました。

最初はコネも何もなく、力のある国会議員に飛び込みでお願いしていたのですが、全く相手にされませんでした。次は、秘書や人手が十分ではない若い議員さんに話をして、少しずつですがOKをもらいました。そして朝日新聞の天声人語で、一気に花開いたという状況です。

―― NPO法人ドットジェイピーを立ち上げられた経緯は。

佐藤 初めは私が社長を務めていた「有限会社アウトポスト」という会社組織で、企業へのインターンシップや議員へのインターンシップという2つの事業を行っていました。先の朝日新聞のコラムの後、議員へのインターンシップに対する反響が、議員・学生両方から数多く寄せられ、議員のインターンシップも継続的にやろうということにはなったのですが、議員インターンシップは採算性が極めて低く、会社としての事業の継続が難しくなったのです。そこで、1999年の年末、多くの人たちの励ましの声を力に、議員インターンシップ事業部を分離・独立させ、NPO法人化しようということになりました。そこで現在の「NPO法人ドットジェイピー」が誕生したわけです。

―― ドットジェイピーという名前に込められた意味は。

佐藤 今、若い人に「政治をやろう」、「政治を盛り上げよう」と言っても、心に響かない。政治という言葉自体が、既に手あかにまみれ、悪い印象がこびりついていて、胸がワクワクしない。ですから、私たちは極力、

「政治」という言葉は使わないようにしています。では、政治に代わる言葉は何だろうとなったときに出てきた言葉が「ジャパン・プロデュース」だったわけです。政治家、議員は日本を創り上げる仕事です。だからジャパン・プロデュースなのです。その頭文字を取ってjp、それにインターネットの世界で「日本」を表すドメイン「.jp」をかけて、「ドットジェイピー」となったわけです。

希望学生550名、受入議員220名 情報提供事業もスタート

―― 次に、現在の活動状況についてお聞かせください。

佐藤 昨年秋に「第15期議員インターンシップ活動報告書」を公表したのですが、まず受け入れ議員事務所について言うと、その第15期だけで212名、これまでの累計でも1,512名を数えるまでになりました。もちろん、これからも受け入れ議員事務所が増えた方がいいのですが、「何でもかんでも増やせ」という状況ではありません。今の受け入れ議員事務所の中には、本当に温かく学生を受け入れ、2カ月間厳しく育てて再び大学に戻す、という素晴らしいプログラムを用意してくださる議員事務所が揃ってきているので、むしろ、そのような議員事務所に対して引き続き協力していただけるようなケアをきちんとしていこうと考えています。

その一方で、学生の方はどんどん増やしていきたい。現在、インターンシップ希望の学生は約550名で、議員1人に対して学生2.5人という感じですが、われわれの活動の趣旨を一言でいえば、「若年投票率の向上」です。選挙で若い人に投票に行ってもらうためには、議員のそばに行くことが一番です。事実、アンケートを採ると、われわれの議員インターンシップの参加者は、8割が選挙で投票に行っています。

現在、全国に北海道から九州まで7つの拠点があるのですが、この4月に東北ブロックの拠点が仙台市に開設され、あと残るエリアは、北陸、四国、沖縄だけになります。そこを順次増やしていければと思っています。

加えて、大学との提携をもっと増やしていきたいと考えています。大学は生き残りをかけて、インターンシップに力を入れているところが多く、受け入れ先の開拓に熱心です。例えば、議員インターンシップを大学の正規の単位授業に組み入れてもらうようなカリキュラム化というようなことも進めています。そうなると、いい加減なプログラムではいけませんし、最低でも2週間100時間以上のプログラムを消化して、修了証書を出し、それで大学の単位認定をしてもらうということも、今取り組んでいます。

NPO法人ドットジェイピー理事長
佐藤 大吾 氏
Sato Daigo

1973年大阪府生まれ。大阪大学法学部中退。1996年インターンシップ事業を創業後、専門事業会社として株式会社インターパーソナルを設立。2003年株式会社ヒューマンデザインオーソリティを設立、大阪商工会議所主催「PWA検定」を立ち上げ、プロジェクトマネジメントの普及活動を行う。この間、NPO法人ドットジェイピーを設立（2000年法人化）。大阪大学客員研究員(2003年～)、早稲田大学客員研究員（2005年～）、NPO学会会員(2002年～)。「21世紀臨調」運営委員(2003年～)。著書に『オモシロキコトモナキ世ヲオモシロク』（サンクチュアリ出版・2003）、『大阪商工会議所主催PWA検定（企画・計画・段取り力）公式テキスト』（日本経済新聞社・2005）。

さらにドットジェイピーでは、政策教育に力を入れていこうと思っています。すなわち、インターンシップに行く前と行った後に、きちんとした教育プログラムが必要なのではないかということです。現状では、最低限のビジネスマナーを学んだだけで、インターンシップ生として議員事務所で勤務することになるわけで、まさに「素人」の状態で事務所に入るのですが、これを少しでも事前にレクチャーをすれば、教育効果は大きくアップするはずです。そこの部分のカリキュラムづくりを進めていきたいと思います。

―― 若年投票率の向上という趣旨を考えれば、ドットジェイピーがこれまで蓄えてきた議員情報等を発信していくことも意味がありそうですね。

佐藤 その通りです。この2月からインターネットのYahoo!Japanと業務提携して、政治政策の情報提供サービス「Yahoo!みんなの政治」をスタートしました。

若者がなぜ投票に行かないかアンケートを採ってみると、最も多い理由は「政治不信」です。ところが2番目に多い理由は「情報が少なくて、誰に投票していいのか、いつ、どこに行けばよいのかが分からない」というものです。政治不信は、私たちではどうにもできない部分ですが、情報不足については、私たちでもサポートすることができます。

例えば、議員の情報にしても、以前自分が投票した議員が、その後どんな活動をしているのかを追跡できたり、自分の住む地域の議員は誰なのかを検索できたり、マニフェストをどこまで実行しているのかを日々チェックできたり、というような情報提供を行っていきます。幸い、われわれは議員事務所とのパイプを持っていますので、情報を事務所から吸い上げて、それをネットから発信していくことができる。このサービスはYahoo!Japanのポータルサイトから利用することができます。

ドットジェイピー9年目にして、ようやくイン

ターンシップ事業に続く第2の事業が始まったところです。

政治に対する意識の変化

―― 議員インターンシップに来る大学生は、どのような学生が多いのでしょうか。

佐藤 就職活動の関係で、8～9月の夏休み期は大学3年生が多く、2～3月の春休み期は1・2年生が圧倒的に多くなります。

さらに就職志望先で見てみますと、政治の世界に行きたいという学生は全体の2割程度、公務員志望がやはり2割程度、残りの6割が民間企業志望です。あとは一部、進学希望とか未定などで、そのような傾向は創業以来ずっと変わっていません。

ただ特徴的なのは、民間志望者のうちマスコミやジャーナリスト志望が結構多いのです。理由を聞くと、政治家はいずれ取材対象となるところだから、学生のうちに見ておきたいという気持ちがあるようです。

とはいえ、多くの学生にとっては、議員がねらいではなく、インターンシップがねらいであるわけです。全国で約30万人の学生が就職を目指し、そのうちインターンを体験することができる学生は約3万人程度に過ぎません。ほとんどがインターンシップに参加できないわけです。そのような状況にあっては、ドットジェイピーの議員インターンシップは、まさにチャンスなのです。

―― インターンシップに行く前といった後の学生の変化というのはいかがですか。

佐藤 これは後ほど、インターンシップ受け入れ議員でもある松野議員の実際の話を聞いていただくと良いのですが、アンケートによる統計（38頁・資料参照）を見てみますと、非常に顕著なのは、政治に対するイメージや議員に対するイメージが、大幅に改善されていることが分かります。特に、議員に対するイメージは、ほぼ全員が悪いイメージから良いイメージに変化しています。この効果は非常に大きいですね。

NPO法人ドットジェイピー理事／
流山市議会議員

松野 豊 氏

Matsuno Yutaka

1969年千葉県流山市生まれ。1988年麗澤高校卒業。1989年株式会社リクルート入社。1999年 4月流山市議会議員に当選（現在2期目）。2000年超党派若手議員の会「東葛ステイツマンクラブ」発足。同年有限会社インスピリットを設立、代表取締役に就任。2002年地域特化型政策シンクタンク「NPO法人地域政策研究所(IRS)」設立。2003年ローカル・パーティー（地域政党）「新世会」設立。2004年NPO法人ドットジェイピー理事に就任。2005年「新世会」代表に就任。2005年ローカル・マニフェスト推進地方議員連盟（会員524名）発足、共同代表に就任。同年千葉県に坂本龍馬の会「下総龍馬会」設立、発起人代表。

・松野豊氏公式ウェブサイト
http://www.matsunoyutaka.jp/

松野 議員をしている人は、やはり人間的にも魅力ある人が多いと思います。だから、近くにいて、行動を共にすると、だいたいみんな感動して、その議員のファンになります。

―― 通常、企業のインターンシップですと、受け入れ先の企業によっては負担増となる場合もあるようですが、その点、インターンシップ受け入れ先の議員事務所にとって、インターンシップ生は重荷なのですか、それともプラス効果があるのでしょうか。

松野 議員や議員事務所にとって、インターンシップ生を受け入れることは、イメージ的にプラスになります。4年に1度は選挙があるわけですが、大学生を受け入れて教育しているという事実はイメージアップにつながり、また選挙時のマンパワーにもなります。特に地方議員の場合には、資金と人員を集めるようなパーティーなど開く余裕がありませんから、インターンシップによる学生との絆は大きな力になります。

それから、少し視点が変わりますが、選挙に立候補して議員になっている人は、やはりどこか志が高い人が多く、そのような自分の姿を学生たちに見せることで、何か学生さんにとって「気づき」を与えるきっかけや、元気を与えることができれば、それは何の見返りを期待せずとも、それだけで嬉しいという議員さんがほとんどです。

―― 松野議員は、これまで何人くらいの学生をインターンシップ生として受け入れてきたのですか。

松野 もう75名になりました。これだけ増えてくると、同窓会が開催できるわけです。例えば、私の場合、今度で10期生になるのですが、松野インターン第1期～10期の同窓会をやると、社会人から学生までの縦のつながりができて、そこからまたネットワークが広がっていく。学生にとっても、そのネットワークの広がりはプラスになっているようです。

―― そのインターンシップ生から、さらに議員が誕生するということも当然、起きてくるわけですね。

松野 まだ私のところからは議員は出ていませんが、ドットジェイピーのインターンシップからは、これまで6名の議員が誕生しています。

―― インターンシップのプログラムは、議員事務所に任せているということでしたが。

佐藤 これまで8年もやってくると、おおよそプログラムの類型化というものができてきます。例えば、「地元べったりコース」とか「政策立案コース」、「デスクワークコース」といった具合です。ですから、新たに受け入れ先を頼むときに、人気のある議員事務所のプログラムを紹介したり、そうした累計パターンを示したりしながら、相談させていただくことは行っています。

それから、ドットジェイピーとしては「最低

100時間のインターンシッププログラムにしてください」というお願いはしています。1日8時間とカウントすると、最低2週間は受け入れて欲しい、そうしないとドットジェイピー認定の修了証をインターシップ生（学生）には出しません。これが条件です。

―― 松野議員の事務所では、どのようなプログラムを実行されているのですか。

松野 私のところは、インターンシップの期間は2カ月ですが、その中で1週間だけは、私と生活を一緒にしてもらう「居候」期間を設けています。例えば、5人のインターン生を受け入れたとすると、1人ずつローテーションで、家に寝泊まりしてもらいます。女性の場合は2人で泊まってもらいます。その1週間以外は、自由参加という形式を採用しています。

私のところのインターンシップ生となると、まず松野組というメーリングリストに入ってもらいます。そして、2カ月間に開催される会合やイベント等に優先順位を付けて、興味あるものについて参加してもらうことにしています。もちろん、居候の1週間は、そういうものは自動的に参加となります。

若者と政治にかかわるインフラづくり

―― 居候期間の1週間は、どのようなプログラムとなっていますか。

松野 この1週間は、やることがきちんと決まっています。まず1つ目は、メーリングリストに朝何時に起きて、何を食べて、どこに行って誰に会って何をしたかということをすべてレポートさせます。そこには価値判断は書かせません。その代わり「五感」を開いて、色や匂いや音といった事実を書かせます。つまり、事実と価値判断を分けて、「五感」と「5W1H」に留意して書くことで、読み手が、読んだときに映像が浮かんでくるような文章の書き方を学んでもらっています。2つ目は官製はがきを7枚渡して、毎日両親に手紙を書いてもらいます。3つ目は感想文を書かせます。こちらは先のレポートとは違って、価値判断を大いに書いてもらいます。そして4つ目は、事務所にある3種類の日めくりカレンダーを必ず毎日めくらせます。そして内容を読ませます。5つ目は、「感想文の感想文」を提出させます。感想文が一週間で7枚、毎日私がコメント付きで返却しているので、居候期間の終了後、それを1週間寝かせた後、それからすべてを読み返して、「感想文の感想文」をもう一度書いてもらっています。そして、この「感想文の感想文」の合格をもって、松野組インターンの卒業としていますが、なかなか1回ではパスできません。これまで75名のインターンシップ生がいますが、1回でパスできた学生は5名くらいだったと思います。大体は禅問答のように3～4回返して、再提出させての繰り返しです。そんなわけで、私のインターンシップのプログラムは、他の議員さんとは、ちょっと違うと思います。

―― 政治家を養成するインターンという雰囲気ではありませんね。

松野 ええ。まさにドットジェイピーがいうところの、ジャパン・プロデューサー養成塾なのだと思います。その結果、学生が議員という手段を選んでくれるのであれば、それはそれで嬉しいのですが、必ずしも議員を目指すものではありません。

―― ドットジェイピーでは、今後の展開として思い描いていらっしゃるプランは何かありますか。

佐藤 まず若年層の投票率向上に向けて、その時代において最も効果的なことを、これからも常に考えて実行していきたいと思っています。そのために、いろいろなジャンルの方などとネットワークを築き、変化に対応できるように備えをしておきたい。「若者」、「政治」という2つのキーワードが出てくると、「それならドットジェイピーですね」と言われるような存在になっていきたいと思っています。

私たちがやっていることは、要するに投票率向上のための、手を変え品を変えのインフラづくりなのです。例えば、ロースクール上がりの人は、必ずしも司法の世界に行かずとも、政治家の公設秘書というような道もあるのではないかと考えています。そのようなインフラをこれからも構築していくこと、それが私たちの目標です。

plus α

- ドットジェイピー [.jp] ホームページ
  http://www.dot-jp.or.jp/
- Yahoo!Japanみんなの政治
  http://seiji.yahoo.co.jp/
- YES!PROJECT
  http://www.yesproject.com

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

h-bunka@lec-jp.com